



南海研だより

No. 19

1988年12月



南太平洋海域研究センターの発足にあたって

鹿兒島大学南太平洋海域研究センター
センター長 井上晃男

鹿兒島大学南太平洋海域研究センターは、昭和63年4月8日に発足しました。昭和73年3月末日まで存続する、時限10年の学内共同利用の教育研究施設です。このたびその初代センター長に選出され、約2年間任にあたることになりましたので、この紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

この新しいセンターは、昭和56年4月に発足し、同63年3月に時限到来にともなって廃止された、旧センターつまり南方海域研究センターを基礎に作られたものです。定員は、専任教官4、事務官1であり、オセアニアおよびその周辺地域について、学際的かつ総合的に調査研究する地域研究の施設です。

旧センター時代の7年間には、フィジー、パプアニューギニア、ソロモン諸島、ミクロネシア連邦などにおいて、現地研究者との共同学術調査を実施して大きな成果を上げました。またシンポジウム、研究会、講演会、公開講座などを通して、当該地域の文化、社会、自然に関する議論を深めるとともに、得られた成果や知識を広く一般に紹介するべく努力してきました。このような広範な活動は、センターの専任教官だけではなく、鹿兒島大学内の兼務教官や、学外の研究者の積極的な協力によって行われたものであることは申すまでもありません。

さて、旧センターの実績の上に作られた新センターの役割について考えてみたいと思います。まず第一は、対象地域すなわちオセアニアとそ

の周辺地域における調査研究活動を活発に実施することです。過去の総合学術調査の成果を基礎に、絞りこんだ具体的なテーマについて調査する考えです。第二には、調査研究を通して国際交流を図ることです。現地研究者との学術情報の交換にはとくに力を入れたいものです。第三には、成果を現地国に速やかに還元し、かつ社会に広く知ってもらおうことです。第四には、対象地域の研究者、とくに若手研究者の育成です。

このほか色々なことが考えられますが、これらのことを実際にやっていくには、予算が必要であることは申すまでもありません。それをどうやって確保して行くのか頭の痛いところです。またセンター自身の問題としては、かねてからの懸案である建物の新設があります。現在は、旧電子計算機センターの建物に入っていますが、面積が不十分で、資試料の保存や会議や研究会の開催などにも支障をきたしているため、どうしても新しい施設が欲しいところです。

センターの運営は、これまでと同様に、センター協議会が中心であり、その運営にかかわる重要事項を審議します。調査、研究に関する企画や立案には兼務教官会議が当たります。さらに、学外にも協力研究者を依頼し、センター専任教官、学内兼務教官および学外協力研究者の三者が協同して研究を進めます。

南太平洋海域研究センターは、旧センターと同様に、『南海研』の略称で行こうと思います。ご支援、ご協力のほどをお願いする次第です。

1 南太平洋海域研究センターの組織

南太平洋海域研究センターは、学内共同教育研究施設である。教官4，事務官2（うち1は非常勤）が専任のスタッフである。この専任教官以外に、学内の8学部および教養部から学長によって任命されたセンター兼務教官約90名と、国内の他大学、研究機関の協力研究者約30名が調査研究活動に参加している。

センターには、センター長を委員長とし、各学部・教養部代表、兼務教官代表、教官会議委員会委員長および専任教官からなる協議会があり、センターの管理・運営にかかわる重要事項を審議する。また、専任教官と兼務教官とで構成する教官会議があり、主として調査研究に関する立案や実施に当る。この教官会議の中には、研究、出版、交流の3委員会がもうけられている。

昭和64年1月1日現在の協議会と研究、出版、交流の3委員会の委員は次のとおり。

センター協議会委員

センター長	井上 晃男 (南海研)
専任教官	寺師 慎一 (南海研) 中野 和敬 (南海研) 柄木田康之 (南海研)
学部・教養部	池田 紘一 (法文) 坂東 義雄 (教育) 藤坂 博一 (理)

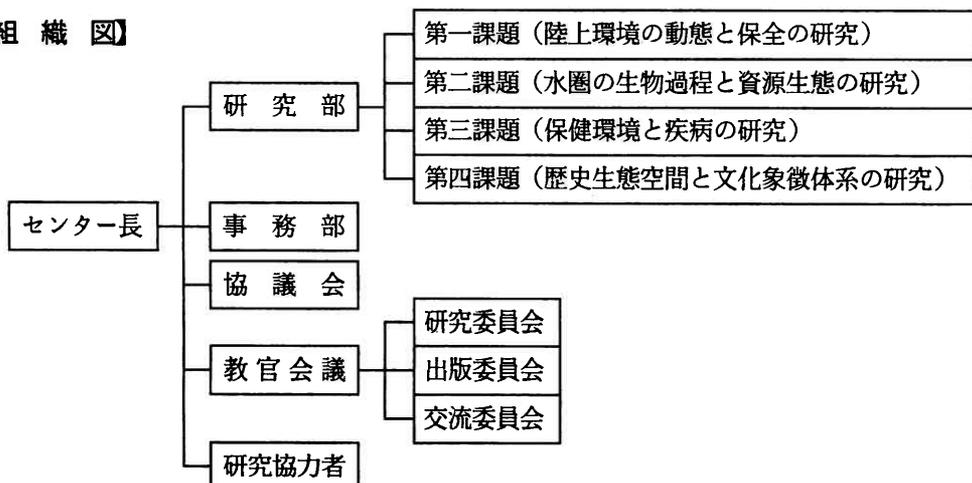
学部・教養部	佐藤 淳夫 (医) 小片 丘彦 (歯) 明石 満 (工) 有隅 健一 (農) 茶圓 正明 (水産) 山下 智 (教養)
兼務教官	木原 大 (医) 早坂 祥三 (理) 片山 忠夫 (農) 平田 八郎 (水産) 浦島 幸世 (教養) 新田 栄治 (教養)

* この他に教官会議委員会委員長3名が加わる。

教官会議委員会委員 (〇印委員長)

研究委員会	〇浦島 幸世 (教養) 八田 明夫 (教育) 林 満 (農) 根建 心具 (教養) 中野 和敬 (南海研)
出版委員会	〇田川日出夫 (教養) 塚原 潤三 (理) 片岡千賀之 (水産) 松田 恵明 (水産) 柄木田康之 (南海研)
交流委員会	〇平田 八郎 (水産) 湯川 淳一 (農) 市川 英雄 (水産) 川村 軍蔵 (水産) 寺師 慎一 (南海研)

【組織図】



2 出版物について

南太平洋海域研究センターの出版物は、定期刊行物として「南太平洋研究 (South Pacific Study)」がある。これは原則として年2回刊行され、原著論文、綜説、資料・研究ノート等を掲載し、専任教官、兼務教官及び学外の協力教官に広く開放されている。前誌の「南海研紀要」第8巻2号を引き継いで、第9巻から出版される。

「Occasional Paper」は不定期刊行物で、南海研関係教官による南太平洋海域についてのグループ研究、例えば、総合研究、海外学術研究、特定研究及びシンポジウム等の成果を公表するもので、研究がまとまる毎に刊行される。既に14号出版されている。

「南海研だより」は南海研を廻る諸行事、研究会、出版物などの情報を盛り込み、不定期に印刷するもので、年1回「News Letter」として英文パンフレットを出版する。既に18号刊行されている。

以上のほか、南太平洋海域研究センターの案内パンフレットが準備されており、必要な向にはセンターに連絡すれば送られることになっている。

3 協力協定を結んだ大学の紹介

南太平洋大学

(University of the South Pacific)

本部をフィジーのスバに置く総合大学。フィジー、ソロモン諸島、バヌアツ共和国、ツバル、トンガ王国、西サモア、キリバス共和国、ナウル共和国、ニウエ、トケラウ諸島、クック諸島の南太平洋フォーラムに属する11の国々の共同出資によって作られた大学で、1968年に最初の入学生を迎えた。

School of Agriculture, School of Humanities, School of Pure and Applied Science, School of Social and Economic Development, の4学部と、Institute of Marine Resources,

Institute of Natural Resources, Institute of Pacific Studies, Institute of Social and Administrative Studies, Institute of the Research, Extension and Training in Agriculture, Institute of Rural Development の6研究所を有している。

教官数約250、学生数約6,000で、トケラウを除く各国に Extension service 機関を配置する。

〔等1回研究会発表要旨〕

ミクロネシアの国家形成と近代化

須藤 健一 (国立民博)

1988年7月14日

日本列島の南に星くずのように連なるミクロネシアの島じま。この島世界の住人は、1521年のマゼランによる Guam 島「発見」以来、スペイン・ドイツ・日本・アメリカの支配下にあった。

ミクロネシアでは、1970年代から自立・独立の機運が高まった。「我われは戦争を知ったがゆえに平和を望む。分割されたがゆえに統一を願う。支配されたがゆえに自由を求める……」と憲法の前文に唱い、統一国家建設をめざした。しかし、言語、社会、文化を異にする島じまは四つの「ミニ国家」に分裂してしまった。その背景には、アメリカの極東防衛戦略が色濃く影を落している。

40年間のアメリカ時代、島の人びとは、アメリカ式の教育、行政、立法、司法の諸制度をうけいれてきた。その経済基盤もすべてアメリカの援助による。国家をつくったとはいえ産業がなく、コブラの輸出と海域への外国漁船の入漁料だけでは、国家経済をまかなえない。「民主主義」の名のもと自由と権利を主張し、労働意欲もなく、酒、マリファナに走り、前途を悲観して命を絶つ若者。そのような若者にあてにされない親たち。我われが「南海の楽園」とイメージするミクロネシアの国ぐにの近代化は、解決すべき多くの問題をかかえている。

[第2回研究会発表要旨]

ボルネオの混合雨林における
種多様性の様式について

Peter S. Ashton (ハーバード大学)

1988年9月12日

Patterns of variation in plant community species richness have been correlated with a variety of environmental gradients, as well as to historical biogeography, but causes of the variation remain unknown. The case is made that long term predictability and short term equability of the rainfall regime, in the presence of influences which maximize the diversity of conditions within the soil surface and the subcanopy of a rain forest community, create the conditions most favorable for species richness among terrestrial plants within one biogeographical region.

手がかりにガラスマオの奥にある滝に貝殻片を含む地層を求めて出かけ、島の北端にアイミリーキ集塊岩が露出しているのもそこまで足を伸ばしたりした。2週間の短い調査期間であったため十分な調査資料採集が出来なかったがそれでも新しく *Pellatispira ireguralis* の産出を加えることができた。

前回は船での寝泊まりで、食事も島の中ですること少なかったが、今回は調査の都合もあって首都コロールのホテル、ペリリュウとアンガウル各島の民宿、バベルダオブ島の北部のガラスマオ、アルコロン各村の民宿と多彩な宿と食事であった。南の島の焦げるような暑さもとの野外調査の後の食事がまずい筈がない。アンガウルの月夜ガニの料理、アルコロンのマングローブガニそして山の手に行くほど美味しくなる椰子のジュース、こうした食事と景色のためだけでも再再度パラオに行きたいと思う。

[第3回研究会発表要旨]

再びパラオへ

八田 明夫 (教育)

1988年10月24日

1986年度の南海研の総合研究でパラオを訪れた際、千葉大学坂上澄夫教授とともに古第三系始新統と考えられていた“アイミリーキ集塊岩”を採集し、それに含まれていた有孔虫化石群集を検討した。その結果、この岩石中に始新世後期を示す有孔虫化石と漸新世を示す有孔虫化石を認めた。このことは、昨年の南海研の Prompt report および本年2月の古生物学会で発表してきた。この研究を進展させるため坂上教授とともに本年5月16日から5月27日迄の12日間、再びパラオを訪問した。

今回の調査ではバベルダオブ島のジープで行ける所はジープで行き、行けない所はボートで出かけた。戦前の調査で報告されていることを

[第4回研究会発表要旨]

ハワイ大学における
東南アジア研究

Shiro Saito (ハワイ大学)

1988年12月5日

The Southeast Asian Studies at the
University of Hawaii

An overview of the Southeast Asian studies program at the University of Hawaii, noted for its breadth and depth, is discussed under the following headings: faculty, course offerings, language program, degree programs, library resources, publications, outreach program, and the East-West Center.

The number of Southeast Asian specialists in Hawaii is considered the largest in the U. S. Thirty faculty members teach 85 courses with 75 to 100 percent Southeast Asia content and 23 other faculty members

teach 82 courses that are 25 to 75 percent Southeast Asia related. Six Southeast Asian languages, Burmese, Ilokano, Indonesian, Tagalog, Thai and Vietnamese, are offered regularly at up to four levels.

A student may study Southeast Asia as an undergraduate or as a graduate student and study in a multidisciplinary degree program in Asian Studies or work on a specific discipline. In 1986/87, 19 masters and 9 doctoral degrees were conferred.

The Asia Collection is probably the only academic research library in the U.S. that includes all of Asia under one administrative head. The collection consists of some 536,000 volumes, 9,500 serials and 115 newspapers and the Southeast Asia collection contains an estimated 73,500 volumes and 6,600 serial titles (4,350 currently received).

The University of Hawaii Press specializes on Asia and the Pacific and publishes extensively on the area. The Southeast Asia Papers are published by the Center for Southeast Asian Studies and the Philippine Studies Working Papers and the Philippine Studies Newsletter are published by the Center for Philippine Studies.

The outreach or community service activities are presented through public lectures, workshops and cultural performances to the general community of Hawaii.

Adding dimension to the program is the East-West Center where resident research staff, invited international research fellows, graduate students from Asia and the U.S. work on research topics important to the Asia/Pacific region.

The rich resources of expertise, programs and research materials, make the University of Hawaii an ideal and exciting place to study and conduct research on Southeast Asia.

[第5回研究会発表要旨]

シンポジウム「南へのまなざし —インドネシア農村事情—」

企画 中野 和敬

1988年12月16日

1) サゴヤシの生産力と村人のサゴ観

— サゴ工場建設をめぐる —

遅沢 克也 (京大農学部)

伝統的サゴ生産集落ラップにおいて、熱帯低湿地の村落開発の1つの可能性を探るために、村人の資本と技術で建設可能なサゴ・デンプン工場を建設した。しかし、実際に村人とサゴ工場を建設し、工場を操業していく過程で、我々農学徒が志向しがちな生産量の向上といったものだけでは把握しきれない村人のサゴヤシ観があることが分かってきた。様々なエピソードを紹介しながら、低湿地に生きる人々の姿を紹介した。

2) 南バンテンの村で儀礼を見る

— 変容の中の「伝統」 —

渡辺 敦 (京大農学部)

社会変容の波の中での村落住民の対応の具体的な姿を南バンテン山地の一村落社会の事例から考えた。焼畑陸稲作から水稲作中心の体系への変化をはじめ多くの技術上の変化の選択的受容を経験しながらも、儀礼を節目に生産と生活を律する基本的姿を今日でも維持し続ける人々。しかし儀礼もまた変化の波を免れなかった。その持続性と変化から村落社会の対応の姿に接近した。

3) 西スマトラ州高地湖周辺域の土地利用

中野 和敬 (鹿大南海研)

ほぼ南緯1度に位置し、スマトラの脊梁山脈にある高地湖集水域の農業を中心とした土地利用の分析を自然及び社会経済環境と関連させながら試みた。このような分析は現状把握のみ

(6) 南海研だよりNo.19

では不十分なので、今世紀初期以来の社会経済環境と土地利用との関係の変化を調べた結果、この悪条件下にある地域の人々が国及び州政府の施策を含む社会経済条件の動きに敏感に対応し、彼らなりに生活を維持するための積極的な、見方によってはあがきにも似た努力を積み重ねてきたらしいことがわかった。

4) ジャワ島農民に伝わる伝統的暦法と農作業の適期をめぐって

五十嵐忠孝（京大東南アジア研）

降雨の季節的变化は天水田や畑地耕作を規制する重要な要素である。ジャワ島の村人は自然環境の示す手掛かり、中でも、昴、オリオン、南十字星などの星、あるいは太陽がある特定の時刻に見える位置などを基本的な手掛かりとして、降雨の季節的变化を予測し、農作業開始の適期を察知している。このシンポジウムでは、私がかつて滞在した西ジャワ州・ブリアガン高地の1山麓村落において知ることの出来た具体的事例の一端を報告した。

第1回公開講座

「南西諸島とオセアニア」

南太平洋海域研究センター発足後最初の公開講座は大学のキャンパスどころか、九州本土から遠く離れた奄美大島の笠利町の国民宿舎あやまる荘で8月1日と2日の両日開催された。この「南西諸島とオセアニア」と題する公開講座は笠利町及び同町教育委員会の後援と全面的な協力のおかげで順調に運営できた。講師陣に本研究センターの専任並びに兼務教官計7名の他

に、地元の笠利町歴史民俗資料館の中山清美氏が加わったため、公開講座が笠利町で開かれた意義が一層高まった。各講師名、講義題目及び講義順序等は一括して別表に掲げる。各講義の内容をごく簡単に以下に紹介する。

井上晃男氏——奄美群島でも被害実例のあるカニ及び魚の毒について、その原因を食物連鎖と関連づけて説明した。

中山清美氏——奄美群島及びその周辺地域の考古学的遺跡と遺物の比較をもとに、奄美群島の人々が昔どこから渡来して住みついたか推論した。

林 満氏——南西諸島、特に奄美群島の砂糖キビ生産を概説し、今後の指針を示唆した後、オセアニアにおける農業の種々の様式について説明した。

市川英雄氏——明治初期以来の南西諸島の漁業の変遷を技術革新及び社会経済環境の変化と関連づけながら展望した。

新田栄治氏——古代の東シナ海及び南シナ海の交易につき、中国を視点の中心に据えて考古学的遺物及び文献史料から述べ得る事柄を展開した。

木原 大氏——奄美群島の人々が切実に対処しなければならないハブについて、生物学的な基礎から被害根絶への方策の見通しに至るまで及ぶ話しをした。

中野和敬氏——オセアニアの農業のうち伝統的な面を中心に紹介した。

寺師慎一氏——熱帯地方及び南西日本に多い病気について主に病理学的に説明したが、一部の病気については予防上の注意にまで言及した。

以上の講義に対して、常時30名前後の方々が熱心に耳を傾け、本公開講座は成功裡に終了した。このような成功に至る道筋を整えてくださった笠利町の有川幸雄町長を始めとする地元関係

者へここに深く謝意を表するしだいである。

別表 鹿兒島大学南太平洋海域研究センター第
1回公開講座「南西諸島とオセアニア」
実施プログラム

	講義題目	講師名(所属)
8 月 1 日 (月)	海と人々	井上晃男(鹿大南海研)
	考古学からみた奄美	中山清美(筥利町歴史民俗資料館)
	農業と人々	林 満(鹿大農学部)
	南西諸島の漁業	市川英雄(鹿大水産学部)
8 月 2 日 (火)	環シナ海の考古学	新田栄治(鹿大教養部)
	ハブ	木原 大(鹿大医学部)
	土地と農業	中野和敬(鹿大南海研)
	熱帯の病気	寺師慎一(鹿大南海研)

新任紹介



柄木田 康之(からきた やすゆき)講師。昭和30年7月8日生まれ。国際基督教大学教養学部卒。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科退学。文学修士。文化人類学専攻。第4課題、歴史生態空間と文化象徴体系担当。

上記が昭和63年8月10日付けでセンターの専任講師として着任した。

柄木田講師はこれまでにニューギニア高地の性差(ジェンダー)とリーダーシップの象徴論的研究、オセアニア社会構造の認識・象徴論的研究、オセアニア地域の社会変化に関する史的構造論的研究を行ってきた。近年の主たる関心領域は、性差体系を中心とした象徴人類学、世界システム論、プラクティス・セオリーにある。

現在はマイクロネシア連邦ヤップ州のオレアイ環礁の調査研究にもとづき、中央カロリン群島における年長者・兄弟姉妹間の表敬行動、土地保有体系などの伝統的社会構造、および行政・教育職等の公的雇用の拡大にともなう社会変化の研究に従事している。またオセアニア地域の

研究に着手する以前には、奄美大島の親族体系とシャーマニズムの研究を行っていた。皆様のご指導とご鞭撻をお願いいたします。

南海研センターの出版物

◆Occasional Papers No.15

MARINE ECOLOGICAL STUDY ON THE HABITAT OF *NAUTILUS POMPILIUS* IN FIJI (The Second Operation) (Ed. by. S. HAYASAKA).

1986年にフィジーで行なわれた第2回目のオウムガイの現地調査(海外学術調査)と、1987年の総括の成果が掲載されている。調査は理学部の早坂祥三教授を中心とした理学部、水産学部の研究者、及び現地フィジーの南太平洋大学海洋資料研究所のUday Raj氏とJohnson Seeto氏が協力して行なわれた。報告書にはオウムガイの生息域の動物相などについて述べられている。B5版84頁、写真版17枚。

外国からの来訪者

◆Prof. Dr. Peter S. Ashton (Harvard University)

理学部堀田満教授の招待で来学、当センターの第2回研究会(9月12日)で講演して頂いた。

◆Mr. Shiro Saito (University of Hawaii)

教養部早瀬普三講師の招きにより来学、当センターの第4回研究会(12月5日)で講演して頂いた。

◆Prof. Dr. Fachrudin (Hasanuddin University, Indonesia 学長)

教養部田川日出夫教授の招きで来学し、当センターを訪れた。

南海研センター専任教官の
海外出張及び研修記録一覧表
(1988年3月～1988年12月)

氏名	在外期間	目的国	用件
柄木田康之(講師)	8月31日～11月3日	ミクロネシア連邦	学術調査
中野和敬(教授)	9月11日～10月3日	ソロモン諸島, パプア・ニューギニア	学会出席及び 共同調査打ち合せ
寺師慎一(教授)	11月6日～11月29日	パプア・ニューギニア	学術調査
井上晃男(教授)	11月16日～12月20日	仏領ポリネシア	学術調査

南海研だより No.19 昭和63年12月24日発行

鹿児島大学南太平洋海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2058